

Title	現代観光における「差異」の重要性についての一考察
Author(s)	野中, 萌; 春山, 康秀; 宮野, 幸岳; 敷田, 麻実
Citation	日本観光研究学会全国大会学術論文集, 24: 353-354
Issue Date	2009-11
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16795
Rights	本著作物は日本観光研究学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Institute of Tourism Research. Copyright (C) 2009 日本観光研究学会. 野中萌, 春山康秀, 宮野幸岳, 敷田麻実, 第24回日本観光研究学会全国大会学術論文集, 2009, pp.353-354.
Description	

現代観光における「差異」の重要性についての一考察

The Importance of "Diversity" For Contemporary Tourism

野中 萌* 春山 康秀* 宮野 幸岳* 敷田麻実**

NONAKA, Moe HARUYAMA, Yasuhide MIYANO, Yukitake SHIKIDA, Asami

キーワード：差異、他者、同質化、観光

1. はじめに

現代社会では、「空気を読む」という言葉が日常的に使われるようになったことに象徴されるように「他者」との「差異」を極力意識させない関係が好まれている。空気を読むとは、人々が当たり障りない人間関係を形成し、周囲から浮かないようにする自己と他者の関係性の調整である。つまり自己と「他者」の間の差異の抑制に熱心になることである¹⁾。

しかし、こうした差異の抑制によって、自己と他者の差異が消失すれば、社会の「同質化」が起きるのではないか。同質化した社会では、差異の体系の上に組み立てられている秩序が不安定なものとなるため、いじめ等の問題が生じやすい²⁾。また、同質化は若い世代特有の現象として捉えられがちであるが、雨宮・萱野(2008)が指摘するように、同質化による閉塞感の漂う「生きづらい」社会は、世代の壁を越えた問題である³⁾。そこで、この問題を解決するため、同質化した社会における差異について議論することは、社会的に重要な課題だと考えられる。

本稿ではその解決手段の一つとして観光に注目するが、その理由は、観光が異文化交流の機会を提供するという特性を持つからである⁴⁾。ここで異文化交流とは、自己と異なる他者に出会い交流することであり、そこには自分と異なる他者の存在がある。そして、異質なものに触れることで、自己と「他者」との違い、または「内なる他者」である自分自身との違いに気付くこともできる。また他者との出会い自体が、自分自身を再構築するきっかけを生む。

そこで本研究では、「差異」の重要性に着目したうえで、観光が差異に気付く機会を積極的に創出できる可能性について考察した。なお、ここでの観光とは、日常生活圏を出て観光地で体験して帰着する一般的な定

義を前提としている。

2. 観光による「差異」性の認識

では、なぜ人々は観光によって差異を認識できるのか、そのメカニズムを明らかにしたい。

まず、観光の持つ「日常生活圏からの移動」の特性をあげることができる。日常生活の中でも、依拠する価値以外の価値や文化と出会い、何らかの差異を感じる機会はあるが、日常生活圏からの離脱を前提として成立する観光では、その機会は相対的に多くなる。また観光地では自然環境などの事物以外にも、観光地の住民や観光関係者との接触があり、日常生活の中での体験よりはるかに他者と出会いは多い。そこで他者あるいは自分自身との差異を意識することは多いはずである。

次に、「視点位置の変換」を指摘することができる。これに関して見田(2006)は、離れた世界に立ってみることで空気のように自明だと思ってきたことがあたりまえではないものとして見えてくると述べている⁵⁾。つまり、他者との出会いだけでなく、自分の思考が依拠する視点の変換が期待でき、そこで観光客は差異を認識しやすくなる。一方、大平は(2008)の「エキゾチズム」の概念を参照して、異質なものと接触や「多様な価値」の体験で、観光客が「自分自身が内部から組みかえられていく」と主張する⁶⁾。

さらに、出かける側としての観光だけではなく、観光客を受け入れる側でも差異の認識は起こりうる。敷田(200?)は地域づくりに関するよそ者を論じる中で、地域内で日常性に埋もれて持つことが難しい感覚や考えを持つよそ者に接することで、地域住民は絶対と思っていることがそうではないということに気づくと指摘する⁷⁾。これは地域づくりに限った話ではなく、観光客を受け入れる側も、交流の中で差異を通じて新たな

* 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻 修士課程

** 北海道大学観光学高等研究センター

視点を獲得することができるということであろう。

このように観光によって差異を認識しやすい状況が提供されることは、先行研究が示唆しており、「差異を認識させる装置」としての観光の働きの重要性に注目する必要があるのではないかと。

3. 現代観光の諸相と課題

観光による差異認識機会の提供は認められるが、実際の観光がそれを果たしてきたかについて検討してみたい。

まず他者との出会いの機会の提供に関しては、須藤・遠藤(2005)が「トーマス・クックの団体観光旅行の客に女性が多かったのも、トーマス・クックたちが観光旅行を予測可能な安全なものにしていったからであった。」と述べている⁸⁾。つまり、マスツーリズムでは管理された安全な「他人」との出会いが演出されるだけで、差異を有した「他者性の高い他者」との出会いには重視されていなかったのではないだろうか。

また、マスツアーの増大によるマーケットの飽和、観光客の興味の変化、観光公害といわれるようなマスツーリズムの弊害を解消するために近年注目されている「ニューツーリズム」でも、差異の認識への注目は不十分である。「ニューツーリズム」では、長期滞在型観光、エコツーリズム、グリーン・ツーリズム、文化観光、産業観光、ヘルスツーリズムなど、従来のマスツーリズムに比較すると多様な交流が可能である。また行政的にも、観光圏整備事業補助制度をはじめとする様々な助成、支援が行われている。しかし、そこでは差異の認識体験を重視した異文化交流の視点はほとんどない。例えばエコツーリズムの場合、敷田(2008)で「自然環境の保全をめざす」、「観光の振興をめざす」、「地域の振興をめざす」の三つの理念が重視されており、差異を発見する視点は指摘されていない⁹⁾。

しかし、マスツーリズムやニューツーリズムという観光形態の変化だけに注目するのではなく、他者性の高い他者との出会いで、差異を認識することが可能な観光が必要なのではないだろうか。その理由は、現代社会の同質化を解決する機会が日常生活の中で十分ではなく、日常生活圏から移動する観光でそれを実現することが効果的だと考えられるからである。「他者」との差異を発見することができる観光を通じて、それを実現してもいいのではないかと。

4. おわりに～「差異」の視点を取り入れた観光

自己のアイデンティティを見だし、そしてその認識をより高めていくためには、他者との出会いを通し、差異を認識した上で、それを受け入れることが必要となる。この差異の受け入れこそが、同質化した社会への大きな処方となりえる。観光はこの差異を提供する大きな役割を担うことができる。

現代の観光は、マスツーリズムから「ニューツーリズム」へと取り組み方が変容するなかで、とくに地方経済衰退の切り札としての観光振興により、経済的メリットに着眼した「地域の復興」への期待がもたれている。しかし、これからの観光は、差異の視点を取り入れた観光への取り組みにより、他者との差異を認めた自己の形成、つまり「人格の復興」としての役割を担う観光が必要だと考えられる。

この観光を通じた「人格の復興」により、他者との差異を認めつつ、多様性を認める力を育み相互変容の可能性をもつ「生きやすい」社会へと変わっていくことが望まれる。

【参考文献】

- 1) 土井隆義 (2008) 『友だち地獄 — 「空気を読む」 世代のサバイバル』 ちくま新書, pp.16-51.
- 2) 赤坂憲雄 (1995) 『排除の現象学』 ちくま学芸文庫, pp.61-66.
- 3) 雨宮処凛, 萱野稔人 (2008) 『「生きづらさ」について — 貧困、アイデンティティ、ナショナリズム』 光文社新書, pp.7-119.
- 4) 岡本伸之編 (2001) 『観光学入門 — ポスト・マス・ツーリズムの観光学』, 有斐閣アルマ,
- 5) 見田宗介(2006) 『社会学入門 - 人間と社会の未来』 岩波新書, pp.25-26
- 6) 大平具彦 (2008) 「文化を通して世界を読む — 観光創造のための文化基礎論として」 『国際広報メディア・観光学院ジャーナル』, pp.11-13.
- 7) 敷田麻実(2005) 「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」 『江津の久爾』 50 巻, pp.75-76
- 8) 須藤廣, 遠藤英樹(2005) 『観光社会学 ツーリズム研究の冒険的試み』 明石書店, p49
- 9) 敷田麻美(2008) 『地域からのエコツーリズム 観光・交流による持続可能な地域づくり』 学芸出版社, pp.37-38